

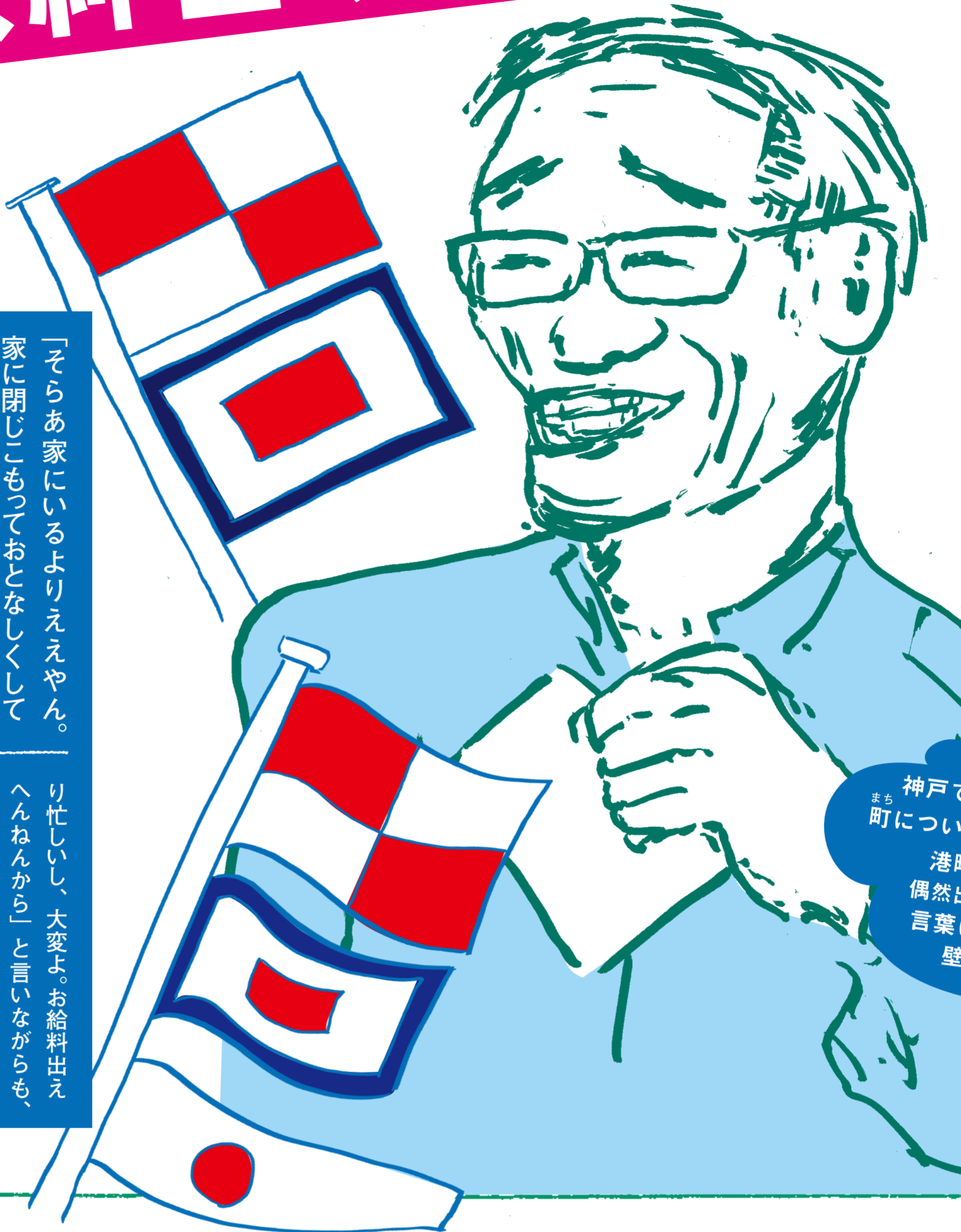
# 船着場の、紳士サロン

文と絵 チーム入港



「そらあ家にいるよりええやん。家に閉じこもっておとなしくしててもしやあない」。旗ぶりおじさん。こと、我妻祐次さん(69歳)は水平線を望みながら銀歯を見せて、ケラケラと笑った。神戸港には年間200隻の船が入港する。その船を見るひと、撮るひと、旗を振るひとなどがデッキに三々五々集まり、そこはおじいちゃんたちのサロン状態になっていた。我妻さんは外国からやってくる大小さまざまな船に「信号旗」を振り続けて8年になる。背丈以上のポールに年季の入った旗が上下二段。それらは二枚合わせて「安航を祈る」の意味だという。旗振り以外にも、神戸の観光ボランティアやまちなかを走るバスの案内係もこなす、頼られる。年がら年中、神戸のまちに出っぱなし。「仕事してた時よ

り忙しいし、大変よ。お給料出えへんねんから」と言いながらも、なんだか楽しそう。船が着くたびに、我妻さんのように「こを訪れるひとたちは、自然と顔見知りになる。会ったらあいさつをして、世間話をする。その絶妙な関係がよいなあと思う。そうこうしているうちに、向こうに船が小さく見えた。ゆつくりだが、確実に船が近づいてくる。我妻さんは仲間と話しながら小さく旗を振る。私たちは海に浮かぶ巨大マンションのような船におののくが、我妻さんはいつものことのようにおおらかに船を見守る。その姿に、年をとるのも楽しそうだなあと思った。



神戸で暮らす皆と、町について考えてみる。港町神戸で偶然出会った人たちの言葉にふれる 壁新聞

## 10分で知る神戸のはなし

文と絵 チーム自動車

一期一會な関係がそうさせるのか、プライベートなあの空間がそうさせるのか、タクシーに乗っていると不思議と心を開き、運転手さんとの会話から思わぬ知識を得たりすることがあります。神戸のことを知りたいと思っただけは、あえてタクシーに乗り込むことから、取材をスタートしてみました。と、いきなり出会ったのは、40年前に福岡からやってきたという山

崎春雄さん。神戸を知るためにずっとラジオを聴き、神戸の歴史や地名の由来などを勉強したそうです。「在原行平いう、京の偉い大臣さんがおったんや。天皇が「行平の顔も見たくないから、すまの方へやってみませ(當時は隅をすまと言った)いうたんや。それで、行平のおったところが『須磨』と呼ばれるようになった」もともと六甲山というのは武庫山むこやまと呼ばれて

おったんや。当時は熟語に同じ読み方の漢字を当てはめるのが風流とされてたから、そこで「六甲」と書いて「ムロ」と呼ぶようになった。明治に入ると、これを役人が正式名称にして、以来「六甲山」と呼ばれるようになったんや」と、そこでタクシーは「MIO」に着。仕方なく車を降りようとする。と「まだまだあるけどな」と一言。あゝまた出会えますように!

